

## 羅蕙錫（ナ・ヘソク）とナショナリズム、 そして＜崔承九（チェ・スング）＞

明 恵 英

### Nahyaesoku and nationalism, and Tyesungu

Myung Hyae-yung

Judging from contents taken from among the above-mentioned two people, Tyesungu was the love of modern times and the suitable partner who could practice “the love of the body and soul” for wise Nahyaesoku. Tyesungu initiated Nahyaesoku into the new knowledge that he cultivated through Japan and they repeated arguments.

However, the two people seem to have agreed “to create Korean things from the knowledge that they got through Japan”, but they were divided in their opinion about “realization of the self of the woman” and “the self of the community”. Nahyaesoku took in his opinion enough and wrote “an ideal woman” and advocated women's rights theory, but as Tyesungu attached greater importance to race sovereignty recovery, he gave her advice calmly that, though he could understand her idea, he could not agree with it because women's rights theory was too early.

It must have been hard for Nahyaesoku not to get support of dearest Tyesungu. It is supposed that she had a blank of a further 2 years and six months for that reason. And it was 1917, 1 year and six months passed after Tyesungu died, at last she was awakened to “the self of the race” and wrote an article that reflected on herself at that time.

## 1. はじめに

韓国初の女性洋画家として知られている羅蕙錫（1896～1948）は、近年、作家やフェミニストとしても注目されている。その結果、羅蕙錫に関する様々な側面が証明され、研究成果をあげている<sup>i</sup>。ところが、羅蕙錫の初期文学作品に色濃く残っているナショナリストとしての顔はまだ十分に解明されていない。

羅蕙錫は、1914年12月女権論『理想的婦人』（『学之光』第3号）を発表し、いち早く女権論者として注目された。それから2年半の空白の後、再び『雑感』（『学之光』、1917.3、以下、『雑感』Ⅰ）や『雑感—k姉さんに與する』（『学之光』、1917.7、以下、『雑感』Ⅱ）を書いている。

ところで、これら二編の評論は、最初の作品『理想的婦人』とはやや趣きが異なることに注目したい。前述の通り、『理想的婦人』では歴としたフェミニストの顔を見せていた羅蕙錫が、2年半後の『雑感』Ⅰと『雑感』Ⅱでは、ナショナリストとしての変身を遂げていることに気付かされる。

羅蕙錫のナショナリストとしての自己形成においては、兄の羅景錫<sup>ii</sup>と恋人の崔承九、そして夫の金雨英の影響が指摘される<sup>iii</sup>。しかし、羅景錫の評論『低級の生存慾』（『学之光』4号、1915.2）を見るとナショナリストというよりは、労働者・農民階級解放運動に力を入れていた初期社会主義者の印象が強い<sup>iv</sup>。一方、金雨英は、1915年1月京都で「京都朝鮮留学生の親睦会」を組織しており、民族主義的な歩みを見せている<sup>v</sup>。羅蕙錫と彼は1916年の夏以降から付き合っているもので、影響は推測できるが法律家であったためか文章としては書き残されていない。

さて、羅蕙錫は、1913年4月から1918年4月（約4年間）東京の私立女子美術学校に留学している<sup>vi</sup>。羅蕙錫は兄の配慮で留学早々から＜学友会＞に参加して仲間と交流するなど、異国生活に難なく慣れていった。

そして、兄の紹介から兄の友人である崔承九と＜靈肉一致＞の近代的な恋を実践することとなる。付き合いの始まりは兄の紹介からだったが、二人は当時のロマンチック・ラブを実践するに相応しい話の通じ合うよき相手であった。当時二人のラブ・ストーリーは留学生たちの中で話題を呼んだが、崔承九はすでに結婚していたため、二人が結ばれないことを心配し激しく悩んでいたようだ。早婚のため、そうした形の恋愛が留学生の中で流行したとはいえ、公にできる間柄ではなかったことは作品にも影響を与えている。

詩人である崔承九（1892～1916.2、雅号：崔素月）は、前に挙げた三人の中でもっとも強力な民族主義者であった。彼は、普成中学校と普成専門学校（現、高麗大学校）を出て1910年頃から慶應大学に留学し予科を卒業している<sup>iii</sup>。留学当時の彼は、学業の傍ら「在日本東京朝鮮学生学友会」（以下、＜学友会＞）の機関誌『学之光』（1914.4～1930.4、全20冊）の編集や印刷を担当するなど重責を担っていた<sup>iv</sup>。崔承九と一番仲のよかった従弟の崔承万によると、「彼は常に成績優秀で、殊に漢文学に長けており、『学之光』に発表した詩と評論に表わされた「ナショナリズム」は当時の時代状況と相まって、朝鮮の代表的な知識人であり文学者であった崔南善からも高い評価を受けていた」と、される<sup>v</sup>。

さて、公にできないこともあってか羅蕙錫は崔承九との関係について殆んど書き残していない。ただ、金雨英との結婚条件に、「崔承九の墓地に墓石を立ててくれること」というのがあり、彼に対する羅の愛情が伺えるのみである。その他、離婚後の1933年に書かれた『慕わしい春夜』（『新東亜』、1933.1）では崔を懐かしんでおり、『離婚告白書』（『三千里』、1934）の中で「19才の時、結婚を約束していた恋人が肺病で亡くなりました。その時私は心に深い傷を負い、一時的に発狂して神経衰弱になりました。」（『羅蕙錫全集』、p.399）と、触れている。

1914年から1917年にかけて、羅蕙錫と崔承九は学友会の機関誌『学之光』等に以下の作品を発表している。羅蕙錫は『学之光』第3号(1914.12)に評論『理想的婦人』と、『雑感』Ⅰ(『学之光』、1917.3)、『雑感』Ⅱ(『学之光』、1917.7)を<sup>x</sup>。同時に崔承九は、『情感的生活の要求—(私の更生)—(K.S兄に与える書)』(『学之光』第3号、1914.12)、以下『情感的生活の要求』、『南朝鮮の新婦』(『学之光』第3号、1914.12)、『あなた自身を革命せよ(Revolutionize yourself!)』(『学之光』、1915.5)、『不満と要求』(『学之光』、1915.7)の評論と、詩『ベルジオムの勇士』(『学之光』、1915.2)、『長い熟詩』(『近代思潮』、1916.1)を書き寄せている<sup>xi</sup>。

羅蕙錫のナショナリズム研究の中で、朴桓(パクハン、2001)は、羅蕙錫の日本留学を軸に、羅景錫の思想や崔承九の評論を引き合いに出し、影響関係を探っているが、作品分析までには至っていない<sup>xii</sup>。

なお、徐正子(ソ・ジョンジャ、2009)は、羅蕙錫の『雑感』Ⅰ、『雑感』Ⅱをあげて「日本体験から、主体が反応した作品」と評した上で、まさに彼女の「肉声」であるこれらの作品を研究することで、「羅蕙錫の芸術および生き方が見えてくる」のではないかと延べ、研究の重要性を指摘している<sup>xiii</sup>。

本研究では、1910年代に書かれた崔承九と羅蕙錫の以上の作品の中から、主に評論を取り上げ比較分析を試み、崔承九が羅蕙錫のナショナリズム形成にどのように影響しているのかを明らかにしたい。

## 2. 『理想的婦人』宣言とく崔承九

朝鮮初の女権論は1906年9月『太極学報』に発表された尹貞媛(ユン・ジョンオン、1883～?)<sup>xiv</sup>の「本国の諸兄諸妹へ」<sup>xv</sup>である。

ユンは、女の役割を国民(=男子)の「母」であると同時に「花」で

ある、そして家庭を照らす「太陽」であると限定し、周縁化している。そしてこれは女性を、国家構成員の一員として、また、社会的存在として一定の役割を担う存在であることに重点をおいた「良妻賢母」論である。

これに比べて、羅蕙錫の『理想的婦人』は、「個人」としての女性、「個性」の発揮できる女性を「理想」としており、しかも「良妻賢母」を強く否定していることから、ユンの女権論とは立場を異にする新しい女権論と言える。

『理想的婦人』では、大きく二つのキーワードから崔承九との関係性を探究できると思う。その一つは、「個人」と「公共」で、今ひとつは、「感情」と「欲望」の問題である。

## 2.1 「個人」対「公共」

言及通り、『理想的婦人』は、国策であった「良妻賢母」主義を批判し、女性の自我実現を先に掲げたことで評価された。

『理想的婦人』の冒頭では、理想を「感情的理想」と「霊知的理想」にわけて論じており、「霊知的理想」の婦人モデルとして、日本の新しい女平塚らいてう、そして、与謝野晶子を挙げている。

江種満子は、『理想的婦人』の中で使われている言葉、「霊知的理想」「恋愛」「天才」「神秘的内的光明」「知識」「技芸」等々から「『青鞥』の創刊の辞「元始、女性は太陽であった」を読んでいたと指摘する<sup>xvi</sup>。他方、キム・ファヨンは、『理想的婦人』の「良夫賢父という教育法は未だに聞いたことがない。ただ女性だけに付属物となる教育主義である」といった文章と、上野葉の「『人形の家』より女性問題へ」（『青鞥』第2巻1号、1912年1月）の一節、「独り良妻賢母と云ふ熟語が有つて、良夫賢父と云ふ詞のないのは、即ち女の意気地がなく、実力のないのにも

起因して居れど、又、男の勝手なことを証明してをるように思われる」を引き合いに出し、青鞥からのさらなる影響を指摘している<sup>xvii</sup>。

一方、『理想的婦人』が出された時は日韓合併から4年が経っていること、留学生の中でも、「改良主義を掲げる民族主義」の右派と「非妥協的な民族主義」の左派に分かれていること<sup>xviii</sup>などからも分かるように、朝鮮の内外でナショナリズムの気運が充満していたことを見逃してはいけない。

さて、羅蕙錫は『理想的婦人』で、「私はまだ婦人の個性に関して充分には研究していない。」と、「個性」という言葉を持ち出している。さらに、理想的婦人の具体的な要件として以下のことを挙げている。

一定の目的をもって有意義に自分の個性を発揮しようとする自覚のある婦人になり、現代を理解する思想と知識および人格において、時代の先覚者となり、実力と権力を持ち、神秘的で、内的な光明をもつ理想的婦人にならなければ不可であると思う。（『理想的婦人』、p.184）  
翻訳、傍線、筆者。以下同じ。

羅蕙錫は、理想的婦人にもっとも適した婦人として、「個性を発揮」できる女性をあげている。そして、そうした女性を「神秘的で、内的な光明」を放つ婦人であると考え。つまり、利他主義の良妻賢母より自己を完成させ＜自我の実現＞を目標とする利己主義の女性を目指すことを最優先課題としているのである。

こうした考え方は、崔承九の書いた手紙、＜1914年4月3日から6日までの4日間＞を基に書かれた『不満と要求』（『学之光』、1915.7）の一節にもよく表われている。

—H兄、この間、僕は兄のことをしばしば想うようになりました。会う度に交わした討話（ママ）（＝対話）のことも思い出されます。（中略）僕らの叢中から「自我の実現」と「公共の図利（ママ）（＝道理）」の二大思想について懐疑の態度を見せていることを往々にして目撃すると言っていますね？—勿論、自我と公同を区別する境界線はどこまでか、実現と道理の明晰な範囲がどこまでなのかは分かりません（元来、厳格な説明はないようです）。（『不満と要求』、p.74）

手紙は「H兄」に宛てられている。「H」は名前や内容からヘソクのイニシャルと見てよい。そして、相手を立てる意味と監視の目を盗むために「兄」が用いられていることが推定される。引用から、二人は、＜学友会＞のメンバーの中に「自我の実現」と「公共の道理」といった二つの大命題に対して疑問を抱いている人が存在することを話題にしている。これはつまり、留学生たちはそれまで「公共の道理」を最優先に考えてきた。が、最近「自我の実現」を考える人が始めているということである。これに崔承九は、「個人」か「公共」かという二つの思考に明確な答えを出してはいないが、「個人」を主張しすぎると、「事業の破壊者」と見なされると懸念する。

崔承九は、羅蕙錫の主張する「女性解放論」を、「知識の進歩の面からは珍奇に思う価値のあること」としてある程度理解を示している。しかし言ってみれば「女性解放論」は「個人主義」から成り立っている思想であるため、日本の女性たちは主張できても、被植民者である朝鮮の女性には時期尚早ではなかったか。しかも、「劇烈な公共事業家」、つまり国家の独立を願う「民族運動家」らにそれが知られたら、衝突を避けられないと強く懸念しており、場合によっては彼らに「事業の破壊者」として烙印を押される恐れさえあると言っている。そして、「絶対的個

人主義」について説明が続く。

崔承九は、羅蕙錫の思想を「不可」とは言わないものの、彼女の「公共の問題を抛棄し」た「絶対的個人主義」には賛成できないと説得しているのである。挙げ句の果ては、羅蕙錫の行動は、人間として「薄情」であるとやや感情的になっている。

これ以外にも崔は、1914年10月6日の『南朝鮮の新婦』（『学之光』、1914.12）でも、「自己の勇氣や權威が折れる」のを悔やんで「慟哭」する婦人像を提示し、朝鮮の婦人たちに「被植民者」である我らの立場を換気させ、「民族的自我」を呼びかけている。

このように、崔承九は、羅蕙錫の『理想的婦人』の思考形成に深く関わっていることが認められる。しかし、彼の力強いアドバイスに対して、彼女はあくまでも自己納得できる答えを見い出していることから、女性運動家としての羅蕙錫の強い信念が伺える。

## 2.2 欲望の「芸術」

『理想的婦人』では、理想とは「欲望の思想」であり、それは「感情的生活」を営むことであるとされる。そして、文章の最後で、「感情的生活を目指して欲望からの芸術に勤む」と結論づけている。

では、この「感情」的生活とはどこから来ているのだろうか。

崔承九は、＜1914年9月29日付け＞の『情感的生活の要求』（『学之光』、1914、12）で、『三国史』の故事を引用して、「聞迅雷落箸した大耳兒の体勢を取らずに、周密に書くつもりです。」と言って、恋人であるがゆえに羅蕙錫に遠慮がちであった今までの態度から一変して直言することを宣言している。

そもそも崔承九の『情感的生活の要求』は、副題に「K.S兄に与える書」と付いており、そのことから、今まで羅蕙錫の兄の羅景錫に宛てら

れた文章と考えられてきた<sup>xxx</sup>。しかし、恋人同士であった二人が通常手紙をやり取りしながら議論を重ねていたことや、作品の内容から判断すると、実の宛先は羅蕙錫であると想定できる。

「我が系縛（ママ）はまず、感情的生活をするように」しなければと。例えば、五官はすべて備わっている、しかし、少しも機能していない。（省略）霹靂が落ちたら気付きますか？断層地震が起ったら分かってくれますか？嗚呼、これをどうすればいいのでしょうか！（『情感的生活の要求』、pp.54～55）

崔承九は、愛する係恋（＝羅蕙錫）に、「五官は備わっていても、機能をしない」と言った後、「神経を故障」したと直言を惜しまない。つまり、彼女の知的な頭脳は認めてもそこに情感が感じられないとして、「感情的生活」を要求している。さらに、「衣服を脱ぎ取られ」ても、それを「取り返そうとはしない」として、「公共」的なことに消極的な姿勢を強い語調で批判しているのである。そして、「霹靂が落ちたら気付きますか？断層地震が起ったら分かってくれますか？嗚呼、これをどうすればいいのでしょうか！」と嘆いてさらに訴えかける。羅蕙錫はこれを受けて、1914年11月5日に『理想的婦人』を書き上げていると考えられる。

『理想的婦人』の冒頭には、「理想とは何か。理想は欲望の思想である。すなわち感情的理想である。」と定義していることを思い出してみよう。つまり、これは「欲望＝感情」という等式が成立する。そしてこの欲望は、文章の最後に、「従って私は現在に自己の一身上の激烈な欲望を持ち、弱みを見せず、ある道に向けて無限な苦痛と闘いながら、目指した芸術に努力したい。」といった形で繰り返される。この「激烈な欲望」

は結果的には「芸術」になるのだが、そもそも「感情的理想＝欲望の思想」であったことから、この「感情的」の意味が何かを考えなければならぬ。

「感情的」は、崔の論からすると、女性も人間として「空腹」「寒気」「悔しみ」の感情を持つ人、つまり植民地朝鮮の状況を哀れんで「民族的自我」に目覚めることである。これを受けて羅蕙錫は「感情＝欲望」であると解釈し、その欲望から「芸術」に専念するという結論を導き出して反論したということなのだ。

『理想的婦人』を読んだ崔承九は、ひるまず1915年5月にさっそく『あなた自身を革命せよ』を書いて、再び羅蕙錫に注文をつけている。これを受けて1917年羅蕙錫は二つの『雑感』を発表するに至る。

### 3. 二つの『雑感』と＜崔承九＞

羅蕙錫は、1914年12月の『理想的婦人』から3年が経った後、再び『学之光』にエッセイ『雑感』Ⅰ（1917.3）と『雑感』Ⅱ（1917.7）を載せて文学活動を再開している。そして、この3年間は彼女をさらなる成長へと導いており、もっとも羅蕙錫がナショナリズムに傾倒していった時期でもある。

#### 3.1 『雑感』Ⅰ— ＜人間らしい、個人＞論

『雑感』Ⅰ（1917.3）は、東京の＜学友会＞での出来事を短い文章で著わしたエッセイである。『雑感』Ⅰの冒頭の一節を引いて見よう。

非難の中で進歩が生まれ、打撃の中で改良が出てくるのは確かであり、これを通して、個人が人間らしい人間になり、一国の文明が生まれるのでしょう。その時、姉さんは“その通り”と頷きましたね。

（『雑感』Ⅰ、p.186）

この文章は、＜学友会＞の集まりで学友同士が自由に議論を交わしている場面を見て、羅蕙錫が仲間と交した会話の一部である。引用を見ると、彼女は「非難」や「打撃」は互いを刺激することで「進歩」や「革新の気運」が生まれ、結果的に、＜人間らしい、個人＞を誕生させると言っている。そして、この＜人間らしい、個人＞という言葉は「一国」に繋がっており、羅蕙錫のナショナリズムの芽生えを物語ってくれる。

さて、崔承九は、『雑感』Ⅰの書かれた2年前の1915年5月『学之光』に『あなた自身を革命せよ（“Revolutionize yourself!”）』を発表している。主に、西洋を例として朝鮮の知識人に訴えかける形式の評論である。

我らはいかなる革命を願うのか。—私自身の革命を願う一方、あなた自身の革命を要求する。これがつまり個人的な革命である。—  
Revolution of Individualityを要求しているのである。“Revolutionize yourself!”を強く感じる。（『あなた自身を革命せよ』、p.63）

引用のように、彼の主張する「革命」は、人類の進化論に基づいており、大きく「時間のように物体の存在を認識する」ことと、「歴史と同様に人類が生活を経営するときは革命—進歩—を連続する」ことを相対する概念として見ている。前者は「緩慢な進行」、後者は「一時に爆発する」としてその差を見い出している。

崔は、「我らはいかなる革命を願うのか」と反問して、「個人的革命」を選択する。そして「革命」のための具体案として、「目覚めよ」「立ち上がれ」「光線を浴びよう」「風向を受けよう」「自己を取り戻せ」「実行せよ」「十倍の速度を出せ」等の項目を挙げ、羅蕙錫を含め朝鮮の知識

人たちに行動を起こすよう促している。

では、こうした崔承九の思想は、羅蕙錫の『雑感』Ⅰにどのような影響を与えていたのだろうか。

羅は『雑感』Ⅰで、崔承九の主張している＜革命理論＞に見合った提案を出している。

「まだ夜が明けてもいないこの曙に誰か手車を引いている。万雷のような車輪の音が聞こえてきます。(省略) 姉さんと私は、このようにゆっくり眠っていて、朝日が東窓を明るく照らし始めた時、やっと目をこすりながら起き上がったのです。」と言っていた姉さんの話がやっと分かりました。(『雑感』Ⅰ、p.188)

この「彼は、遠い所を目指して、曙に早起きして旅立つ」という文章は、崔の提案した「目覚めよ」や「立ち上がれ」、「実行せよ」の項目を視野にいて書かれていると考えられる。そして「私＝(羅蕙錫)」は「やっと分か」ったと言っている。

さらに、今の朝鮮女子について、「確固たる信念の欠乏」と「理知的解決力の貧弱」を挙げ、そのため「事業」に成功できないと指摘した上で、自分は、「今までの都会生活」を棄て「白雪界」に足を踏み入れ、「滑って頭が割れる覚悟」で頂上を目指したいと決意を見せる。

このように、羅は『理想的婦人』から2年半が経った、1917年にきてやっと「民族的自我」に目覚め、崔の訴えに答えているのである。しかし彼女の出した答えは、崔の言っている「個人」と「公共」との中での選択ではなく、朝鮮の女子に見合った＜人間らしい、個人＞、つまり、「理知」を備えた個人(＝女性)になってから、その次に、事業家としての「人間」、つまり「ナショナリスト」を目指したいと言い、日本の

それとは異った朝鮮に見合った新しい女権論を打ち出しているのである。  
そして、次の作品『雑感』Ⅱでは、その具体案を書き示している。

### 3.2 『雑感』Ⅱ—崔承九への返歌

羅蕙錫は、崔承九が亡くなって1年後の1917年7月の『学之光』13号の追悼特輯に、『情感的生活の要求—K.S兄に与える書』（以下、『情感的生活の要求』）の返答と見られる『雑感』Ⅱ（1917.5.6）をかき寄せている<sup>xx</sup>。

そこで、『雑感』Ⅱ（6ページ）と『情感的生活の要求』（4ページ）を照らし合わせつつ検証し、その謎を解きたいと思う。

ではまず、二つの作品の冒頭の部分からやや長めに引いて読み比べてみよう。

#### ① ———K.S兄。

三田の森、品川の海が好い個所であると言えるのも、温情を運んでくれる日光が照耀し、香りを包んで持ってくる微風が徐々に動くときに限ってのことです。（『情感的生活の要求』、p.53）

お姉さん！

春の陽射しが綺麗だと言えるのも、花の蕾がつんつん伸びてくる時や、青ずんでいる柳の枝がだりだり垂れ下がって、時々吹いてくる微風にゆらりと揺れるときであり、桃花、梨花が満開で、世の中が微笑むときに限ってのことです。（『雑感』Ⅱ、p.190）

② 今日の自分としては、今日の呼吸のできない暴風の日には、今日の眼鼻莫開する狂雨の日には、自然に胸中は攪亂され、不愉快な思いばかりをしてしまいます。（『情感的生活の要求』、p.53）

今日のように、黒雲が押し寄せ、暴風が起こり、埃の塊が次々と目の

前を塞いで気が動転するような日には、自然に心が揺れて、精神が攪乱され、何とも言えないほど自我に対する不平と恐怖ばかりが引き起こされます。（『雑感』Ⅱ、p.190）

- ③ 一必然、傲然と立っている常緑樹や、己惚れな人間たちにも、未久に戦慄的な大掩襲があるでしょう。この瞬間、僕はやむを得ず、最愛の吾兄に答信（ママ）を書きたいと思います。（『情感的生活の要求』、p.53）

嗚呼、あんなに自慢気に直立している電信柱や、四季青々の松の木さえも、間もなく戦慄的な大掩襲に追われると思って、私はもう壮快で面白かったこともすっかり忘れて、恐怖にさらされて思わず身震いしました。（『雑感』Ⅱ、pp.190～191）

まず、両作品の冒頭部分を二つに分けて引用して見ると、両作品とも、「兄」と「姉」で始まっており、互いに相手に呼びかける形式を取っている。作品の中に用いられている言葉を見ると、「自然に胸中は攪乱され」「自然に心が揺れて、精神が攪乱され」、「壮快な感情」「壮快に思っ  
て」、「戦慄的な大掩襲」「戦慄的な大掩襲」等々の同義語、または、類義語で埋め尽くされている。なお、内容からすると、二つの文章は共にこれからの何かの大混乱を予告するような組み立てである。

では、二人はいったい何を「壮快」に思ったのか。また「戦慄的な大掩襲」とは何を意味しているのだろう。

両作品とも、二人は一時期何かに「壮快」な気持ちを味わったと言っている。羅は、「青柳の枝が折れる」のを「壮快」に思い、崔は、「僕こそ、初めは壮快な感情があ」ってそのことを「支持」したかったと言う。つまりこれは、前に言及した「自我の実現＝女性解放」対「公共の道理＝民族的自我」のことであろう。

そこで羅は、今までの自分を振り返って、「兄と同等」であると己惚れて「兄」のアドバイスを受け入れようとしなかったことと、崔が「情感的生活の要求」で「天鵝絨の上で倒行している」と指摘していた、「天鵝絨椅子での貴族的な生活＝自我の実現」を反省している。そして羅は、「良策」として「大事業」論を持ち出しているのである。

この「大事業＝民族運動」<sup>22</sup>については、崔の『不満と要求』ですでに言及されており、羅は、今になってそれに同意し、実行したいと言っているのである。

とはいうものの、羅は、「天鵝絨椅子で最後まで書きたい」と言い、あくまでも女性運動家の自覚をもって「民族的自我」に目覚めた、＜人間らしい、個人＞を「良策」として提示していることが分かる。その道はつまり、「朝鮮女性」から教育や修養を経て「個人」へと、そして最後に「人間＝大事業家（＝独立運動家）」になるといったプロセスを要するものである。

次に、文章の最後の部分を比べて見よう。

しかし、運命というのは信じません。前進する人がいなければ後繼はあり得ません。探検する人がいなければ、その道は永久に開けずに終わります。（省略）K.S兄！僕は、めげずに家に帰るために、筆を置いて雨装します。（『情感的生活の要求』、p.56）

探検する者がなければ、その道は永遠に開けない。我々が欲心を持たなくては我が子孫に何を受け継がせられるでしょう。（省略）すぐ倒れそうな家を離れるために雨装をするためにこの辺で擱筆します。（『雑感』Ⅱ、pp.195～196）

『雑感』Ⅱの最後では、「探検する者がなければ、その道は永遠に開

けない。」と、崔の言葉をそのまま真似ている。なお、『情感的生活の要求』に出されていた、「霹靂が落ちたら気付きますか？断層地震が起ったら分かってくれますか？」という質問には、「いつの間にか地震が起っています。家が揺れています。」と答え、自分の時代認識に変化が起っていることを暗示する。その上、「嗚呼、いっそのこと雷に当たって死んでも泥に滑って大恥をかいても、家の外に出てみようと思います。」と、羅は崔の結末と同様に、考えたことを行動にうつすために「筆」の代わりに「雨装」を選んで、これからの民族運動への実践をほのめかしている。この後、羅蕙錫は実際1919年の3・1独立運動に加わる<sup>xxii</sup>。

このように、羅の『雑感』Ⅱは、文章の形式や内容から、崔の『情感的生活の要求』の返歌であることが認められる。

羅蕙錫は、最愛の人であった崔承九の注文通り、『理想的婦人』から一歩進んだ『雑感』Ⅰと『雑感』Ⅱを通じてナショナリズムとフェミニズムを混合させた形で＜人間らしい、個人＞を打ち出し、朝鮮女子のための新しい女権論として提示したのである。

#### 4. おわりに

今まで、羅蕙錫の日本留学時代に書かれたエッセイを論ずる際、恋人の崔承九からの影響は指摘されるものの、具体的な検証は行なわれず目新しい論文はなかった。本稿では、女性運動家としての自己形成期に当たる1910年代に焦点を当てて、そのとき発表された作品を中心に分析を試みた。

その結果、1910年代に書かれた羅蕙錫のエッセイ『理想的婦人』は、崔承九の『情感的生活の要求』や『南朝鮮の新婦』、『不満と要求』の影響を受け、『雑感』Ⅰは『あなた自身を革命せよ』の、そして『雑感』

Ⅱは『情感的生活の要求』の返答であることが判明した。

以上の二人の中で交された内容からすると、崔承九は、日本を通じて培った新しい知識を伝授し、議論を重ねていた。しかし、二人は「日本を通じて得た知識から、朝鮮のものを作り出す」ことには意見が一致していたと見えるが、「女性の自我の実現」と「公共的自我」といったところでは、意見が分かれていたのである。羅蕙錫は彼の意見を十分参考に取り入れて、『理想的婦人』を書き女権論を唱えているが、崔承九はそれより民族主権回復が先だったため、理解はするが時期尚早であるため賛成はできないと冷静にアドバイスしている。

最愛の崔承九に支持を得られなかったことは、羅蕙錫には耐えがたいことだったに違いない。そのことで羅蕙錫はそれから2年半という空白を持ってしまったのではあるまいか。そして崔承九が死んで1年半が経った1917年になってやっと「民族的自我」に目覚め、当時の自分を反省した文章を書いているのである。

羅蕙錫が考え出した「良策」とは、「個人」か「公共」かといった両者択一ではなく、女性解放が民族解放に従属されるのを恐れ、先に教育を受けて「個人」となった上で、大事業家として「独立運動」に加わるという、いわば＜人間らしい、個人＞であったのである。

## 注

- i 特に、1999年からは＜羅蕙錫記念事業会＞が結成され、同年4月と12月の二回にわたって、「羅蕙錫を正しく知る国際シンポジウム」が開かれ、彼女の絵画、小説、女性解放論、家族史、民族意識等々が証明された。
- ii 羅景錫は、1910年日本に渡って東京正則英語学校に留学しており、

- 1912年から1914年までは東京高等工業学校に在籍した。(チョン・ヘギョン (1992)、「日帝下在日韓国人の民族運動の研究」、韓国精神文化研究院博士論文、p.75～76)、さらに彼は、大杉栄、逸見直造とも交流し(『倭政時代人物史料』1、p.107) 留学当時から<学友会>のメンバーとして活躍しており、李光洙や崔承九らとも活発に交流していた。彼は、聡明で才能のある妹のために、自ら進んで留学先や恋愛相手を選んで与えるなど、生涯、羅蕙錫の人生に大きく関わっている。(イ・サンギョン (2009)、『わたしは人間として生きたい』、p.95)
- iii 朴桓 (2001)、「羅蕙錫の民族意識の形成と民族運動」、『女性：歴史』、pp.165～184
  - iv ユ・シヒョン (1997)、「羅景錫の生産増殖論と物産奨励運動」、『歴史問題研究』2、pp.296～299
  - v 独立運動史編纂委員会、『独立運動史資料集』13、1977、pp.31～32
  - vi 1915年1月から1年間は、父から結婚を勧められたが応じなかったことで学校に戻れず、そのまま朝鮮のヨジュ公立普通学校で教員をしている。
  - vii 従弟の崔承万によると、崔承九の大学生活はとても真面目で優秀だったという。(崔承万 (1985)、『僕の回顧録』、p.9)
  - viii 朴桓 (2001)、前掲載書、p.166
  - ix 朴桓 (2001)、前掲載書、p.166
  - x 羅蕙錫 (2000)、『羅蕙錫全集』、李・サンギョン編集、テハク社
  - xi 遺作として、鍾 (1915.10) 他24編が残っている。(金・ハクドン (1982)、『崔素月作品集』)
  - xii 朴桓 (2001)、前掲載書、pp.165～185

- xiii 徐正子（2009）、「羅蕙錫の文学と日本体験－＜植民地期朝鮮文学者の日本体験に関する総合的研究＞東京シンポジウム参加記」、『文明ヨンジ』、pp.179～192
- xiv 朝鮮初の女権論は1906年9月『太極学報』に発表されたユン・ゾンオン（尹貞媛、1883～？；1898年父の亡命により日本に渡り、女性教育家の原富子の門下生になる。1905年には東京音楽学校を卒業し、朝鮮の女性として初めてアメリカを留学している。）の「本国の諸兄諸妹へ」である。
- xv 大抵、我が国の女は、自己の感化知力がどのくらい社会と関係のあるものかを知らなくてもよいと思う。女とは、国民之母であり、社会之花であり、人類之太陽である。国民之母とは、不備多言な女でも可知であり、社会之花とは、万一、人間社会から女子を進取無知にしたらこれは実に無味無色な暗黒天地になるだろう。（中略）人類之太陽とは、一個の家庭を花園に比すれば、朝日が東からすつくと立ち上り、その燦爛たる光彩は花園を照らすと、花々草々がどんなに鮮明で繁華になることだろう。（「本国の諸兄諸妹へ」、『太極学報』第二号、1906.9）
- xvi 江種満子（2007.3）、「1910年代の日韓文学の交点－＜白樺＞・＜青鞨＞と羅蕙錫－」、『文教大学文学部紀要』、p.17
- xvii キム・ファヨン（2004）、「近代日韓における女性をめぐる言説」、大阪大学院博士論文、p.14
- xviii イ・サンギョン（2009）、「前掲載書」、p.40
- xix 金・ハクドン（1974）、『韓国近代詩人研究』、p.18
- xx 同号に、崔承九の従弟である崔承万の詩「素月」（1917.4.23）も載っている。
- xxi キム・ファヨン（2004）、「前掲載論文」、p.22

xxii 羅蕙錫は、1919年3月2日梨花女子大のメンバーらと秘密会合を持って、独立運動の参加資金を工面するために開城と平壤に赴いている。3月8日そのことが発覚し日本警察に逮捕され5ヶ月投獄されたが、同年8月に証拠不十分で釈放された。その後、1923年3月起こった「義烈団事件」にも夫婦が関わっている。